

令和 2 年 6 月 8 日現在

機関番号：14501

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2016～2019

課題番号：16K02628

研究課題名（和文）統語構造の階層性および非均一的な言語現象に関する包括的研究

研究課題名（英文）A Comprehensive Study of the Hierarchy of Syntactic Structures and Non-Uniform Linguistic Phenomena

研究代表者

岸本 秀樹 (Kishimoto, Hideki)

神戸大学・人文学研究科・教授

研究者番号：10234220

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,400,000円

研究成果の概要（和文）：自然言語の構造的な要因から生じる非均一的な言語現象についての研究をおこなった。特に、節の周辺部の階層構造に加え、複雑述語の階層構造など、命題の決定に関わるものをその考察の対象にした研究と、階層性の違い以外の要因も考慮に入れて説明をしなければならない現象を対象に研究をおこない、自然言語の階層構造についていくつかの知見を与えることができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

非均一的な振る舞いを示す言語現象について、普遍性のある理論体系の開発をおこなった。理論的な貢献だけでなく、経験的なデータを蓄積する記述的・実証的な貢献も可能な結果がいくつか得られており、成果は、生成文法・認知言語学・機能言語学などの文法理論に寄与する。また、最終その成果を応用することにより教育などに対しても寄与できると考える。

研究成果の概要（英文）：This study has investigated a number of non-uniform linguistic phenomena that are derived from factors related to a number of constructions. The research has been divided into studies investigating phenomena surrounding layered structures in clause peripheries and complex predicates, and studies on linguistic phenomena that must be accounted for taking factors other than hierarchical structures into consideration. As a result of research, a number of insights have been obtained about hierarchical structures of natural language.

研究分野：言語学

キーワード：階層性 統語構造 非均一性

1. 研究開始当初の背景

言語の構造は、階層をなしているということは疑いようのない事実であるが、それが、どの程度重層的になっているかという問題については統一した見解は得られていない。統語構造の階層性を解明しようとする試みの一つが、「カートグラフィー」と呼ばれるプロジェクトである。このプロジェクトでは、従来試みられてきたよりもより精緻な構造記述をもとに、言語に対する有益な一般化を見つけ出そうとする。このプロジェクトでは、従来試みられてきたよりもより精緻な構造記述をもとに、言語に対する有益な一般化を見つけ出そうとするものである。このプロジェクトの成果は、Aelbrecht, Haegeman and Nye (2012), Haegeman (2012), Svenonius (2014)などでも報告されている。

カートグラフィーの研究は、もともとヨーロッパの言語を中心としたものであったが、最近の研究報告では、言語の対象や扱う内容も多様化してきている。このプロジェクトでは、日本語やその他アジアの言語に関する研究も、少しずつであるが発表されてきている。日本国内で行われた日本語の階層構造に関するもっともよく知られた研究としては、南(1974, 1991)を挙げることができる。南が提案する階層モデルは、ヨーロッパのカートグラフィーと比べてもかなり早く、日本が誇る先駆的な研究であると言える。南のモデルに関しては、その後、いくつかの部分的修正提案(例えば、吉本(1993),益岡(1997)など)が出されているものの、西欧でのカートグラフィー研究のもの比べると、精緻化が遅れている状況にあると考えられる。また、近年は、節の周辺部に関して、ヨーロッパで展開しているカートグラフィーの枠組みに基づく研究も出ている(長谷川編(2008)など)が、それは既存の枠組みを日本語に当てはめるとどのようになるかということを検証するものが多い。日本語のカートグラフィー研究は、ほとんどが節の周辺部に関するもので、文の核となる命題部分の検証はまだ未開拓の状態にあると思われる。日本語の研究にはまだ未開拓の部分が多く、日本語を中心に詳しく研究を進めると、いろいろな貢献ができる可能性が残されている。

2. 研究の目的

自然言語の構造的な要因から生じる非均一的な言語現象について、記述的な側面を重視しながら、その本質を解明し、当該現象を説明するための包括的な理論構築を行い、言語構造に関するこれまでの知見をさらに深めることを目指す。言語の形式と意味の関係を明確にした上で、教育などの応用の可能性も視野に入れ、日本語とアジアの言語および西欧語との対照研究を出発点として、通言語的に適用可能な理論の開発をする。言語のデータを詳細に検討する実証的な研究を行い、自然言語における統語構造の変異の可能性について追求する。通常、構文の構造が同じであれば、その構文は同じ統語的な振る舞いを示すはずである。しかし、見かけ上の形式が同じでも異なる振る舞いをする現象が自然言語には数多く観察される。本研究ではこのような言語現象を「非均一的な言語現象」と呼び、本研究の研究対象とする。

本研究では、いわゆる節の周辺部の階層構造に加え、複雑述語の階層構造など、命題の決定に関わるものをその考察の対象にし、原理的な説明を加えることを目標にする。また、複雑な要因で起こる非均一的な言語現象もこれまでにあまり研究されておらず、現象を詳細に検討することにより、これまでになかった新たな知見を提供できることを目指す。

3. 研究の方法

本研究では、以下の二つの個別課題を設定して、研究を進め、二つの課題から自然言語の階層

構造を明らかにした上で、本研究で得られた知見やそれに付随する経験的なデータをまとめ、全体を包括する理論および説明を提示し、結果をまとめる。

1) 構文の階層性の解明：語の並びが見かけ上同じであっても、統語的な振る舞いが異なる現象がいくつも存在する。例えば、日本語やアジアの言語において特徴的な複雑述語構文では、「彼が話し始めた」と「彼が話し終わった」のように、単に複合動詞の後部動詞の選択が異なるだけで、同じ構造をもつように見える。しかしながら、このタイプの現象は複合動詞の埋め込み動詞の階層構造の違いに起因すると考えられるさまざまな不均一な現象を提示する。これまでの階層構造の研究では、これまであまり体系的に取り上げられていない現象を深く掘り下げて研究することにより、自然言語に関するより深い知見が得られる可能性がある。本課題では、いわゆる節の周辺部の階層構造に加え、複雑述語の階層構造など、命題の決定に関わるものをその考察の対象にし、原理的な説明を加えることを目標にする。

2) 構文が非均一性を示す要因の解明：見かけ上は、同じような構文を作るように見えても、統語的な振る舞いが同じにならない非均一的な言語現象のうち、一部は階層構造に起因するものの、他の要因も考慮しなければ体系的な説明ができないものを本個別課題で取り上げる。例えば、「揺るぎがない」や「とりとめがない」のような複雑形容詞における副詞の修飾が絡む現象は、述語内の階層性と関係するとも考えられるが、それだけではなく、格のパターンや名詞部の拡張などについて体系的な違いを示すことがわかっている。そのため、階層性の違い以外の要因も考慮に入れて説明をしなければならない。このような複雑な要因で起こる非均一的な言語現象もまた、これまであまり研究されておらず、現象を詳細に検討することにより、これまでになかった新たな知見を提供できる可能性がある。本課題では、複雑な要因の絡む非均一的な言語現象をいくつか体系的にとりあげ、説明理論の構築を目指す。

本研究で設定した個別課題である「構文の階層性の解明」と「構文が非均一性を示す要因の解明」について（文献の検討、仮説の設定・検証、中間まとめ、等の）さらに細分化したより具体的な目標を設定したうえで、基本となるデータの収集と整理をおこない、理論的考察のための基盤づくりや研究目標達成のために必要となる基礎的な研究を進めた後で、理論体系の開発およびその検討・調整をおこない、最終的に研究成果をとりまとめる。

4. 研究成果

非均一的な振る舞いを示す言語現象について、日本語を中心に、他言語と対照しながら、一般化（構造的な特性）を明示的な形で提示し、普遍性のある理論体系の開発をおこない、いくつかの研究成果を出した。

初年度の研究の目標は、いわゆる節の周辺部の階層構造に加え、複雑述語の階層構造など、命題の決定に関わる階層構造をその考察の対象にし、原理的な説明を加えることである。特に、日本語および英語を中心に基本データの収集と整理をおこない、いくつかの構文の比較対照をおこなった。フランス、香港に出張し、当地の大学主催のワークショップ等で研究発表をおこない、また、資料集および意見交換のためにイタリアで行われた言語学の学会にも参加した。国内においては、日本英語学会のシンポジウムの発表、福岡言語学会で研究発表をおこなった。

二年目は、複雑な要因の絡む非均一的な言語現象をいくつか体系的にとりあげ、説明理論の構築を目指して研究を進めた。本年度は、日本語および英語に加えて、シンハラ語を加えて、研究の対象となる言語をひろげ、理論的に重要になるいくつかの構文の比較対照をおこなった。本年度の研究発表としては、ニュージーランド言語学会におけるシンハラ語の非項依存関係に

についての発表，そして中国北京で開催されたカートグラフィーの国際言語学会におけるシンハラ語の節の上部構造についての研究発表がある。この成果は学術雑誌Glossaに掲載された。また，資料収集および意見交換のためにアメリカで行われたJapanese/Korean Linguisticsにも参加した。さらに，シンガポール国立大学のコロキウムでの発表および意見交換・資料収集をおこなった。国内においては，慶應大学の慶應言語学コロキウムにおいての格と統語構造に関する研究発表，国立国語研究所でシンハラ語のとりたて表現の研究発表をおこなった。

三年目においては，経験的な事実の発掘を中心に据えて，理論的考察をさらに進めていった。日本語・英語・シンハラ語について理論的に重要になるいくつかの構文の比較対照をおこなった。本年度の海外の研究発表としては，南アフリカケープタウンにおいて開催された第20回国際言語学者会議およびエストニアのタリンで開催された第51回ヨーロッパ言語学会において日本語の例外的格標示構文についての発表をおこなった。イギリスのエジンバラ大学，ロンドン大学において，例外的格標示構文についてコロキウムでの発表をおこなった。フランスのパリの日本語研究会においては，日本語のN-スル構文の研究発表をおこなった。この成果は影山太郎・岸本秀樹（編）『レキシコン研究の新たなアプローチ』に掲載された。その他，日本言語学会第157回大会，ワークショップにおいては，シンハラ語の名詞補文節についての発表を行い，日本英語学会第36回大会ワークショップにおいては，VN-スル構文の研究発表を行った。

最終年度も，非均一的な言語現象をいくつか体系的にとりあげ，説明理論の構築を目指して最終目標に向けて研究を進め，引き続き，日本語・英語・シンハラ語について理論的に重要になるいくつかの構文の比較対照をおこなった。The twelfth conference on Syntax, Phonology and Language Analysisでは，日本語の例外的格標示構文を中心にした発表をおこなった。また，国際学会Role and Reference Grammar 2019の国際会議において，日本語の自他交替について研究発表をおこなった。さらに，「2019年日本語の誤用及び第二言語習得研究国際シンポジウム」で動詞の反使役化・脱使役化の講演をおこなった。出版された研究成果としては，シンハラ語のとりたて表現，名詞修飾表現に関する論文，日本語の軽動詞構文，動詞の文法化，複雑述語の脱語彙化の論文がある。さらに，否定極性表現の論集の編集（共編）をし，その中には，否定極性表現と統語構造の論文が含まれている。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計16件（うち査読付論文 14件 / うち国際共著 1件 / うちオープンアクセス 1件）

| | |
|--|-----------------------|
| 1. 著者名 岸本秀樹 | 4. 巻 2 |
| 2. 論文標題 「複雑述語構文の脱語彙化」 | 5. 発行年 2019年 |
| 3. 雑誌名 『コーパスからわかる言語変化・変異と言語理論』 | 6. 最初と最後の頁 220-238 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|---------------------|
| 1. 著者名 岸本秀樹 | 4. 巻 1 |
| 2. 論文標題 「軽動詞構文の移動現象：項上昇と名詞編入」 | 5. 発行年 2019年 |
| 3. 雑誌名 『言語におけるインターフェイス』 | 6. 最初と最後の頁 11-24 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|---------------------|
| 1. 著者名 岸本秀樹 | 4. 巻 1 |
| 2. 論文標題 「日本語の否定極性表現と統語構造」 | 5. 発行年 2019年 |
| 3. 雑誌名 『極性表現の構造・意味・機能』 | 6. 最初と最後の頁 50-79 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|----------------------|
| 1. 著者名 岸本秀樹 | 4. 巻 1 |
| 2. 論文標題 「軽動詞構文における意味役割付与のメカニズム」 | 5. 発行年 2019年 |
| 3. 雑誌名 『レキシコンの現代理論とその応用』 | 6. 最初と最後の頁 99-126 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|---|----------------------|
| 1. 著者名 Hideki Kishimoto | 4. 巻 第12号 |
| 2. 論文標題 "Resultative verb compounds in Chinese." | 5. 発行年 2020年 |
| 3. 雑誌名 『神戸言語学論叢』 | 6. 最初と最後の頁 12-53. |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|---|-----------------------|
| 1. 著者名 Hideki Kishimoto | 4. 巻 1 |
| 2. 論文標題 "Negation." | 5. 発行年 2018年 |
| 3. 雑誌名 Handbook of Japanese Linguistics, | 6. 最初と最後の頁 300-331 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|---|----------------------|
| 1. 著者名 Hideki Kishimoto | 4. 巻 34 |
| 2. 論文標題 "On the grammaticalization of Japanese verbal negative marker." | 5. 発行年 2018年 |
| 3. 雑誌名 Journal of Japanese Linguistics | 6. 最初と最後の頁 65-101 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) https://doi.org/10.1515/jjl-2018-0005 | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|---------------------|
| 1. 著者名 Hideki Kishimoto, Prashant Pardeshi, and Peter Hook | 4. 巻 LA250 |
| 2. 論文標題 "Displaced modification: Picture-noun constructions in Marathi and Japanese." | 5. 発行年 2018年 |
| 3. 雑誌名 Topics in Theoretical Asian Linguistics | 6. 最初と最後の頁 45-71 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 該当する |

| | |
|---|---------------------|
| 1. 著者名 Hideki Kishimoto | 4. 巻 LA250 |
| 2. 論文標題 "Some asymmetries of scope assignment in Sinhala." | 5. 発行年 2018年 |
| 3. 雑誌名 Topics in Theoretical Asian Linguistics | 6. 最初と最後の頁 73-96 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|---------------------|
| 1. 著者名 岸本秀樹・于一楽 | 4. 巻 1 |
| 2. 論文標題 「(漢語/和語)一字形態素-スル」の語形成と形態構造」 | 5. 発行年 2019年 |
| 3. 雑誌名 レキシコン研究の新たなアプローチ | 6. 最初と最後の頁 55-80 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|---|-----------------------|
| 1. 著者名 Hideki Kishimoto | 4. 巻 17 |
| 2. 論文標題 "Negative polarity, A-movement, and clause architecture in Japanese." | 5. 発行年 2017年 |
| 3. 雑誌名 Journal of East Asian Linguistics | 6. 最初と最後の頁 109-161 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) https://doi.org/10.1007/s10831-016-9153-6 | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|-----------------------|
| 1. 著者名 Hideki Kishimoto | 4. 巻 4 |
| 2. 論文標題 "Case marking." | 5. 発行年 2017年 |
| 3. 雑誌名 The Mouton Handbook of Japanese Syntax | 6. 最初と最後の頁 447-495 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|---|--------------------|
| 1. 著者名 Hideki Kishimoto | 4. 巻 3(1).9 |
| 2. 論文標題 "Focus concord constructions in Sinhala: A discourse-syntactic perspective." | 5. 発行年 2017年 |
| 3. 雑誌名 Glossa | 6. 最初と最後の頁 1-25 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) https://doi.org/10.5334/gjgl.260 | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である) | 国際共著 - |

| | |
|--|---------------------|
| 1. 著者名 岸本秀樹 | 4. 巻 第4巻 |
| 2. 論文標題 「語彙部門」 | 5. 発行年 2016年 |
| 3. 雑誌名 朝倉日英対照言語学シリーズ：形態論 | 6. 最初と最後の頁 27-57 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|---|----------------------|
| 1. 著者名 Hideki Kishimoto | 4. 巻 23 |
| 2. 論文標題 "Another look at negative polarity items in Japanese." | 5. 発行年 2016年 |
| 3. 雑誌名 Japanese/Korean Linguistics | 6. 最初と最後の頁 99-118 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|-----------------------|
| 1. 著者名 岸本秀樹 | 4. 巻 1 |
| 2. 論文標題 「文の構造と格関係」 | 5. 発行年 2016年 |
| 3. 雑誌名 日本語ハンドブック | 6. 最初と最後の頁 102-145 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

〔学会発表〕 計15件（うち招待講演 6件 / うち国際学会 8件）

| |
|--|
| 1. 発表者名 Hideki Kishimoto |
| 2. 発表標題 “When intransitives behave like passive: De-causativization in Japanese.” |
| 3. 学会等名 Role and Reference Grammar 2019 (国際学会) |
| 4. 発表年 2019年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 Hideki Kishimoto |
| 2. 発表標題 “On the position of ECM subjects: A case study from Japanese.” |
| 3. 学会等名 The twelfth conference on Syntax, Phonology and Language Analysis (国際学会) |
| 4. 発表年 2019年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 岸本秀樹 |
| 2. 発表標題 「語彙概念構造と日本語研究：反使役化と脱使役化を巡って」 |
| 3. 学会等名 「2019年日本語の誤用及び第二言語習得研究国際シンポジウム」（招待講演）（国際学会） |
| 4. 発表年 2019年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 岸本秀樹 |
| 2. 発表標題 「複雑動詞構文におけるV2の脱語彙化」 |
| 3. 学会等名 『言語変化・変異研究ユニット』第5回ワークショップ（招待講演） |
| 4. 発表年 2019年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 岸本秀樹 |
| 2. 発表標題 「日本語の節構造と否定極性表現」 |
| 3. 学会等名 『ワークショップ：極性表現の構造・意味・機能』（招待講演） |
| 4. 発表年 2019年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 Hideki Kishimoto |
| 2. 発表標題 "On the exceptional case marking construction in Japanese." |
| 3. 学会等名 The 20th International Congress of Linguists (国際学会) |
| 4. 発表年 2018年 |

| |
|---------------------------------------|
| 1. 発表者名 岸本秀樹 |
| 2. 発表標題 「非対格仮説と数量副詞」 |
| 3. 学会等名 日本語誤用と日本語教育研究会（招待講演）（国際学会） |
| 4. 発表年 2018年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 Hideki Kishimoto |
| 2. 発表標題 "Syntactic differences between ECM and ECM-like constructions in Japanese." |
| 3. 学会等名 The 51st Annual Meeting of the Societas Linguistica Europaea (国際学会) |
| 4. 発表年 2018年 |

| |
|------------------------------|
| 1. 発表者名 岸本秀樹 |
| 2. 発表標題 「シンハラ語の名詞補文節について」 |
| 3. 学会等名 日本語学会 |
| 4. 発表年 2018年 |

| |
|------------------------------|
| 1. 発表者名 岸本秀樹 |
| 2. 発表標題 「「VN-する」の意味役割の付与」 |
| 3. 学会等名 日本英語学会 |
| 4. 発表年 2018年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 Hideki Kishimoto |
| 2. 発表標題 "Operator fields for focusing in Sinhala." |
| 3. 学会等名 The Second International Workshop on Syntactic Cartography (IWSC2017) (国際学会) |
| 4. 発表年 2017年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 Hideki Kishimoto |
| 2. 発表標題 "On A-bar dependencies in Sinhala interrogative focus constructions." |
| 3. 学会等名 NZLINGSOC17 (国際学会) |
| 4. 発表年 2017年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 岸本秀樹 |
| 2. 発表標題 「シンハラ語のとりたて表現について」 |
| 3. 学会等名 Prosody and Grammar Festa 2 |
| 4. 発表年 2017年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 Hideki Kishimoto |
| 2. 発表標題 2Structural aspects of NPI licensing in Japanese." |
| 3. 学会等名 日本映画学会（招待講演） |
| 4. 発表年 2016年 |

| |
|---------------------------------|
| 1. 発表者名 岸本秀樹 |
| 2. 発表標題 「動詞句を焦点化する日本語の擬似分裂文」 |
| 3. 学会等名 福岡言語学会（招待講演） |
| 4. 発表年 2016年 |

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

| | 氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号) | 所属研究機関・部局・職 (機関番号) | 備考 |
|--|---------------------------|-----------------------|----|
| | | | |